

幕末明治の写真師列伝 第二十七回 下岡蓮杖 その二十六

淡島椿岳没後（明治 22 年 9 月 21 日）、蓮杖は明治 32 年（1899）に「浅草画十八番」という 18 枚の浅草の名所名物、故事風物などの極彩色の画を製作して、これを浅草土産として売りに出している。それぞれの画には蓮杖自身の以下の歌も添えられており、この歌はそれぞれの画についての説明代りともなっていた。

- 一番 浅草の王とおうとの取組へひみきに附たかしの提灯
- 二番 四海波治る御代に風神は奥の御堂に侘住居して
- 三番 六地藏にげもするかと金網をかぶせて諸願たのみこそする
- 四番 銭づかひあらき地藏にひきかへて塩なめくらすぢぎう尊じやぞ
- 五番 三途川死出の小袖をはぎとりて浮世の垢を濯ぐ脱衣婆
- 六番 目も鼻もなでつぶされてびんづるは多くの人の病ひ癒さむ
- 七番 日本一ここあさくさの御繁盛鳩までめでぼつぼふくらす
- 八番 伝へ聞く世に名も高き甚五郎うまい工匠と今もほめけり
- 九番 一つ家に眼ひからず包丁の我子としらず姥が手料理
- 十番 堅相な御姿なれど御心は文をとりもつ粋な久米様
- 十一番 お多福の弁天様もこの頃は唱歌謡ひて月琴をひく
- 十二番 慶応の頃に旧巢を立のけど雷門と名のみ残れり
- 十三番 飛ではね命かざりに働いてしやんと坐つた日本魂
- 十四番 世の人のおきてさはぐにながながと横に涅槃のお釈迦たふとし
- 十五番 上見れば及ばぬ事のおほき世といつも下見てさとす天人
- 十六番 もろもろの罪をあらはすじようはりに流石そのままうつる閻王
- 十七番 打囃す笛や太鼓や拍板古風うれしき三社祭札
- 十八番 祐天に吞ました剣を吞むならば汝の願ひかなふ寒行

（十八番 浅草土産浅草画下岡蓮杖案）

しかしながら蓮杖没後に内田魯庵は『思ひ出す人々』（春秋社、大正 14 年（1925）年 6 月初版発行）で、「（前略）明治十四、五年ごろまでは江戸の気分がマダ浅草には漂っていた。一つは椿岳や下岡蓮杖や鶴飼三次というような江戸の遺老が不思議に寺内に集って盛んに江戸趣味を發揮したからであった。（中略）椿岳没後、下岡蓮杖が浅草絵の名を継いで泥画を描いていたが、蓮杖のは椿岳の真似をしたばかりで椿岳の洒脱と筆力とを欠き、同じ浅草絵でも椿岳のとは似て非なるものであった。が、その蓮杖も二、三年前故人となって、浅草絵の名は今では全く絶えてしまった。（後略）」と書き残している。

明治 35 年（1902）、蓮杖はわずか 26 歳で亡くなった姪の以智（前田覚平の長女）の写真を元に描いた紋付姿の以智の油絵（肖像画）を描いている。

明治 36 年（1903）、学習院女子部の築地水交社発卵園遊会で「楠公桜井の別れ」他の公演が行われることになり、蓮杖にその活人画の背景制作が依頼されて、蓮杖は子息の東太郎と共に、約一か月かけて、三田の電車車庫を借りて背景を制作している。これはヨーロッパから帰国した山本芳翠が写場の背景画を製作していた蓮杖のことを知っていたことから、山本芳翠が蓮杖に依頼した仕事で、和田三造、白滝幾之助、山本芳翠、北蓮蔵、玉置金司、湯浅一郎などと共に長い竹の先に筆を縛りつけて描いた。「奥村助右衛門の妻」などの、約五百号大の大きさの背景画であった。

明治 37 年（1904）2 月 8 日、日本とロシアが朝鮮と南満州（中国東北）の支配をめぐる戦った日露戦争が勃発。

明治 39 年（1906）、浅草公園五区の店は子息の東太郎に任せて、蓮杖は妻・登和と娘ひさを連れて本郷小梅町（現在の向島）に閑居している。ちょうどこの頃に明治の元老・金子堅太郎が蓮杖の元を訪ねて、蓮杖は金子から過分の贈り物を貰った。その答礼のために蓮杖が娘ひさを連れて金子の一番町のお屋敷を訪ねると、金子家からしばらくの間ひさを借りたいと懇請されたのだが、ひさはこの当時としては珍しいシンガーのミシンを使う技術を学びたいという希望もあったので、この願いは丁重に辞退申し上げた。

それから明治 41 年（1908）、さらに蓮杖は本郷小梅町から下谷山伏町（現在の北上野）に移った。しかし、この頃に東太郎夫婦が写真背景画の修業のために国内行脚の旅に出ることになったことから、翌明治 42 年（1909）に蓮杖は再び浅草公園五区に戻るようになった。ちょうどこの頃（明治 41 年）に中国の書の収集家としても知られ、森鷗外や夏目漱石等の作家とも親しく、『吾輩は猫である』『若菜集』『野菊の墓』などの挿絵や題字を書いた中村不折と交友を結んで、「観音像」の画を描いている。

明治 43 年（1910）、蓮杖は自己の米寿の祝いのために、六世尾形乾山（長女よしの嫁ぎ先）のところへ行き、焼物で「升」を製作している。

大正元年（1912）8 月、日本の写真に対する長年の貢献により、東京府より蓮杖へ木杯が贈られることになり、同時に表彰を受けることになった。この年、蓮杖は大正天皇の即位を記念して「富士超えの龍」の画を描き、また「琴棋書画図屏風」を製作している。ちょうどこの頃（明治 45 年から）に蓮杖の元へ戸塚幸民がたびたび訪れて、蓮杖から直接話しを聞いて、後に『関東写真蓮杖』（横浜市図書館編「郷土よこはま vol.1/1.2」（横浜市図書館、昭和 37 年（1962 年））の掲載）を書き残している。

大正 3 年（1914）2 月 23 日、蓮杖は絶筆の「達磨画」を描く。同年 3 月 3 日、浅草の自宅において蓮杖永眠。享年 92 歳であった。3 月 6 日午後 1 時より、東京本郷春木町の中央会堂において葬儀。浅草キリスト教会の永井直治牧師の司式のもとに葬儀は盛大に執り行われ、蓮杖が洗礼を受けたバラ神父、タムソン神父などもこの葬儀に列席された。この後、蓮杖は東京都豊島区駒込の染井霊園に葬られた。

（森重和雄）